

---

# 赤椿

Yuki\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤椿

### 【Nコード】

N6870F

### 【作者名】

YUKKI\*

### 【あらすじ】

あなたに『居場所』はありますか？

二歩で距離を詰められる、そんな間合い。

相手は一步も踏み出そうとしない。だから彼も踏み出さない。

握った刀の柄。慣れ親しんだその柄が、戦慄のせいか、いつもより硬く思える。

相手の足が土を踏む。右へ、半歩ずつ半歩ずつずれていく。…こちらの隙を窺うためだ。

彼も同じように半歩ずつずれ、一切隙を見せなかったが、ここで動きを止め、刀を下段に構える。

さあ、来いよ。

中段に構えた相手の刀が煌く。ざつ、と砂を蹴り、相手は一步踏み込んでくる。

一直線の光になって、こちらに向かってくる刃。彼はそれを下段から、刀をすくい上げるようにして受け止める。

ギツ、と刃と刃のぶつかる音。

刃の表面の削れた音。

相手を力で弾き飛ばして踏み込み、上段に構えて上から斬りかかる。隙は多いが、弾き飛ばされて一瞬怯んだ相手には威力ある出方だ。相手は刀の背を手の手で支え、なんとか刃を受け止めたものの、力は彼の方が上。

また、弾き飛ばす。

この喧嘩に、意味など無かった。

どちらが正義だということもなければ、悪だということもない。

ただ、お互いが気の立っている状態で、偶然夜道で出会った

ただ、それだけだった。

猛然と斬りかかってくる相手の刃をかわし、その背に深く刃を食い込ませる。

紅蓮の花火が、地上で炸裂した。

一瞬だけ、相手は動きを止める。…現状把握ができていないのだ。それを機に、今度は腹を裂く。腹から、鎖骨へ。

相手はひとつ咳き込んだ。刃が肺を傷つけたからだろう、その咳には血が混じる。

その赤色が、頬へ散った。

倒れていく相手の体躯を冷めた目で見つめ、気づく。彼の右肩を、相手の刃が貫いていた。肩に刺さる死んだ相手の刀。肩から引き抜いて、彼は呆然とその刀を見つめる。

傷の少ない刀だった。

練習で藁俵を斬っただけの刀。誰かを斬ったことの無い刀。

自分のとは、大違い。

そんな彼に、声が掛かった。

細い、震えた声。小綺麗な格好の町娘が、そこに立ち尽くしていた。

「肩の、怪我……」

その言葉に、彼は自分の右肩から血が噴出しているのに気づく。痛みが、痺れを伴って襲ってきた。

「……………」

意識が遠のく。町娘が悲鳴を上げそうになり、自分で口を塞ぐ。

気づけば、畳の部屋で手当てをされていた。

傷の熱にうなされる目が見つけたのは、必死で自分の看病をする赤衣着物の小綺麗な町娘。血の色とは違う、赤色。器用に結われた髪に差された、赤玉のかんざし。

何故か助けずにはいられなかったのだと、町娘は言った。

あんまりにも透明な目をしていたから。

手を掴んでおかないと、飛んでいきそうなのがしたから。

「変でしょう?」

町娘は笑う。

その笑顔と共に、かんざしが揺れる。

心が揺れる。

戦に行く前の日に、町娘にかんざしを手渡した。散々迷って買った、梅の花のかんざし。…町娘は、赤色が好きだから。

「ありがとう」

ちよつと遠慮して、それでも嬉しそうに、町娘ははにかんだ笑みを浮かべる。

初めて見せる笑顔。彼は思わず顔を逸らす。その顔は、耳まで真っ赤。町娘は可笑しそうに笑う。

戦は怖くない。

死に直面する場面は何度もあった。

そもそも、町娘が助けてくれなければ、この命はなかった。

今は、町娘にこうやって笑いかけてもらえるから、命が惜しいと思う。

活けるのにはちょうどいいと思った。

なんて言つて、手に持っていた花を渡す。

赤い、真つ赤な椿の咲いた枝。

匂いはなく、静かに佇んでいて、存在主張はしないけれど、大きくて華やかな椿の花。

赤色の好きな町娘は、ただ見事に咲いたその花に目を奪われている。その花の意味を、花言葉を知らぬまま。

『我が運命は君の掌中にあり』

君がここで生きているから、自分も生きようと思う。

君がここに居るから、自分もここに居ようと思う。

だから、戦で自分が帰ってくるのを、ここで待っていてはくれないだろうか。

生きていてほしいと、願っていてはくれないだろうか。

そうしたら、自分は何があっても、生きて戻ると誓うから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6870f/>

---

赤椿

2010年11月11日07時16分発行